

成果報告

慶應義塾大学環境情報学部4年 72048433 山西櫻子

「メンタルヘルス政策実施における医療情報システムの活用—IAPT政策におけるIAPTus活用のケーススタディ」という内容の研究を、マレーシアのクアラルンプールで開催されたICOPH(International conference of Public Health, 国際公衆衛生学会)でポスター発表した。

発表は研究における「背景」「目的」「研究方法」「研究結果」「考察」「今後の展望」の6項目で発表を行った。

はじめに研究の背景に関しては、英国で2007年から実施されているIAPT(Improving access for psychological therapy, 心理療法のアクセス向上政策)では、精神疾患患者に対して一般的に利用されていた薬物療法にかわり、心理療法を第一選択肢として提供することを目的としている。この政策の特徴としては、①IAPTサービス利用者の臨床アウトカムを測定し、二次情報として評価するエビデンスに基づいた政策であること、②患者の二次情報をオープンデータと公開し、データの活用を幅広い研究者等に促進していることである。IAPTusはIAPT政策実施にあたり開発された患者の医療データを収集、管理する代表的な医療情報システムである。

そして本研究の目的としては、IAPT政策のような先進的・革新的なメンタルヘルス政策の実施のために、IAPTusのような医療情報システムがどのような役割を果たしたのかについて調査することとした。IAPT政策における医療情報システムの利用によって収集した医療データを二次利用した研究のレビュー、分析を行い、2022年度の政府によるIAPT政策改善提言と比較することで、医療データの二次利用による研究が実際にIAPT政策の実施にどのような影響を他会えているか明らかにした。

RQ(リサーチクエスチョン)①: 患者の医療情報データの二次利用研究のカテゴリーはどのように分類されるか。

RQ②: レビューされた研究はどのように政策の実施に影響を与えているのか。

RQ③: メンタルヘルス問題を解決するために、医療データはどのような役割を果たすのか。

研究方法に関しては、IAPT政策における医療情報システムの利用によって収集した医療データを二次利用した研究をスコーピングレビューした。スコーピングレビューは、まだ先行研究が少ない研究分野への分野横断的な知見を新たに発見することができる研究手法である。本研究では、Jenny(2022)が行った最新のスコーピングレビューを参考にし、同じプロセスを用いて実施した。

研究結果としては、IAPT政策による医療情報データを利用した研究は、7カテゴリーに分類された。①IAPTサービスの潜在的需要がある支援者の特定、②IAPTサービスのシステムデザインに関する研究、③基礎研究、④IAPTサービス利用者の改善予測モデルの開発、⑤IAPTサービスでの臨床実践に関する研究、⑥IAPTサービスによる経済的効果の評価研究、⑦IAPTサービスに対する監査研究の7項目である。レビュー文献内では、基礎研究、経済的効果の評価、監査項目に属する文献以外で何かしらの提言が研究者からされていた。これら研究者からの提言と、2022年度に発表された政府からの回答である“The government’s response to the Health and Social Care Committee’s expert panel evaluation: The Government’s progress against its policy commitment in the area of Mental Health Services in England.”を比較した。

主に研究からの提案としては、①サービス提供者のウェルビーイングを向上すること、②特定のサブグループに対しての新しい治療モデルを開発すべきであること、③動的予測モデルを活用したフィードバックシステムを構築し、治療の順調性を常にフォローアップする必要があるとしている。

政府からの回答としては、①サービス提供が可能な資格ハードルを下げ、サービス提供者の拡大、②よりアウトリーチ的介入が可能になるよう財源を確保すること、③在宅医療の推進の必要があるとしている。

この結果から考察として、IAPT政策の実施に伴い構築された医療情報システムは、データの一元集約、匿名化によって長期間での治療の追跡や、オープンデータとして利用されることが可能になった。これによりデータリンケージによって、他行政機関の壁を超えてデータ連携が可能になった。これにより、メンタルヘルス問題の社会的複雑性の可視化が可能になった。しかし、データリンケージによってIAPT政策利用者のサブグループの特定と、アウトカム分析が可能になることで、IAPT政策のサービス提供者が利用できる臨床実践的改善、他行政機関との連携を図る包括的アプローチを行うシステムデザインへの改善などが示唆された。本研究では、二次情報を用いた研究を分析し、メンタルヘルス・ネットワーク内のシフトを解明する上で有用であることを強調した。しかし、患者の自己評価が主な情報源である二次情報のみに依存すると、提供された治療の質を完全に把握できない可能性がある。オンライン・セッションを通じて質的研究の幅が広がる可能性があるにもかかわらず、定量化可能な指標に過度に依存することを避けるために、サービス提供者の視点を統合する必要性が認識された。二次データから抽出されたエビデンスの重要性と実践者の視点との間のこの潜在的な不一致は、提供者の負担と利用者の利益とのバランスを目指した今後の議論の必要性を強調している。

この研究発表に対して他の学会参加者から、

- ・なぜスコーピングレビューという手法を採用したのか
 - ・研究者と政策実施者間での直接的コミュニケーションの機会はあるのか
 - ・政策実施におけるリソース等を考慮した、より実践的研究はあるのか
- という質問をいただいた。

スコーピングレビューという手法に関しては、政策運営と医療情報データの活用の関連性を調査するという先行研究が現時点ではなく、また、レビュー文献の分野が他分野にわたり、分野横断的になるという点から、この手法を採用した。

医療情報データを二次利用した研究者とIAPT政策実施者の間での直接的なコミュニケーションという面での調査はできておらず、ただ有識者会議や、政府主導での定期的な監査が行われ、その中に研究者も参加しているなどの点から、限定的ではあるが研究者の直接的関与もあると考えられる。

政策実施におけるリソース等を考慮した、より実践的研究はあるのかという質問に関しては、1件の監査報告書とそれに伴う医療情報データを利用した分析研究が見つかったが、このような実践的研究は非常に稀であると回答した。

今回のICOPHの学会参加は、自身の研究の問題点と、本研究の可能性を発見する機会となった。